

あの遺跡は今
14

平成24年 2月19日(日)
滋賀県立安土城考古博物館
整理室ほか(調査整理課)
参加費無料



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
www.shiga-bunkazai.jp

埋蔵文化財の整理調査を通して得られた成果・新知見を紹介します。
また、整理室を公開して出土品を展示・解説し、整理作業の公開・体験も行います。
ホンモノの出土品をみて、ふれて、滋賀の歴史を体感できる一日です。

共催：滋賀県教育委員会

■ ぐあいさつ ■

現地での発掘調査により出土した遺物や遺構を記録した図面・写真類を整理して発掘調査報告書にまとめる整理調査。その成果と作業を見て・聞いて・体験できるのが「あの遺跡は今!」です。

発掘調査終了後の出土品の整理調査や、その成果をわかりやすく一般の方々に公開する事業で、整理調査成果報告会と整理作業室一般公開を行います。

ホンモノの出土品を間近に体感し、埋蔵文化財への親しみと理解を深めていただけることを願います。

目次

■ 整理調査成果報告会資料 (1～24)

- ◇ 成果報告 1 針氏城遺跡(2～9)
- ◇ 成果報告 2 清滝寺遺跡(10～15)
- ◇ 特別報告 「発掘調査から見る湖国の地震と人々の暮らし」(16～24)

■ 展示解説資料 (25～33)

- ◇ 塩津港遺跡
「平安時代後期の地震跡が出土」(26)
- ◇ 針江浜遺跡
「マグニチュード7.5級の噴砂の断面」(27)
- ◇ 清滝寺遺跡
「五輪塔の中から化石みつかる」(28)
- ◇ 針氏城遺跡
「環境変化を乗り越えた歴史」(29)
- ◇ 北萱遺跡
「石器が語る河川の水と砂の力」(30)
- ◇ 宇佐山古墳群
「弥生～古墳時代の墓地と奈良時代の祭祀場」(31)
- ◇ 関津城遺跡
「戦国時代の城からみつかった穀物類」(32)
- ◇ 上御殿遺跡
「木棺墓からみつかった玉類」(33)



■ 整理調査成果報告会 特集：災害と人の歴史 ■

今回の整理調査成果報告会では、特徴ある2つの戦国時代の遺跡の調査成果を報告します。また、特別に県内の遺跡から見つかった地震跡についても報告します。

遺跡に残された自然災害の痕跡が伝える警鐘と先人達の知恵を、皆さんと共有する場にしたいと考えています。

◇会場：2階セミナールーム

◇受付 《12：30～13：00》

◇趣旨説明 《13：00～13：10》

◆成果報告1 針氏城遺跡（湖南省市）《13：10～13：40》

針氏城とその環境—古墳時代・戦国時代・近世の歩みと土砂災害

◆成果報告2 清滝寺遺跡（米原市）《13：40～14：10》

土石流多発地域に営まれた武家の名門・京極氏の菩提寺に関わる新知見

◆特別報告「発掘調査からみる湖国の地震と人々の暮らし」《14：10～15：00》

県内25か所にのぼる地震跡から読み取る警鐘と知恵

【表紙写真：針江浜遺跡の噴砂】

報告会のテーマが「災害と人の歴史」であることから、今回の表紙は、針江浜遺跡でみつかった噴砂の断面写真としました。

通常の液状化で噴き上がる地層は粒子の細かい砂ですが、針江浜遺跡では小石を含む砂礫も一緒に噴き上がっていることが大きな特徴です。噴砂は幅10～30cmほど、噴き上がった高さは1mほど、長さは20m以上ありました。このことから、この噴砂を引き起こした地震の規模はマグニチュード7.5級の大地震であったと想定されています。



◆成果報告 1 針氏城遺跡

針氏城とその環境—古墳時代・戦国時代・近世の歩みと土砂災害

1. はじめに

針氏城遺跡は、『江州佐々木南北諸氏帳』・『芥川氏正徳二年自記 甲賀古土之事』に針和泉守の名と針村住とあることから、針和泉守の城に比定されている中世城館跡です。これまで城の構造等、詳細は不明でしたが、今回の調査で堀跡を2条検出し、新たな知見を加えることができました。

2. 地理的環境

針氏城遺跡は、野洲川左岸の平地、近世東海道に沿って展開する針集落の南側に位置します。その範囲は、東西を由良谷川と家棟川にはさまれ、南北は城山と呼ばれる丘の北裾から近世東海道までとなります。

針氏城遺跡が所在する湖南市は、県南部を西流する野洲川の中流域にあり、琵琶湖からは約11km離れています。野洲川がやや蛇行しているため、北岸の平地がほぼ中央で東西に分断されているのに対して、南岸は中央部が広いまとまった平地となっています。この南側の平地を丘陵側から近世東海道、JR草津線、国道1号が向きを揃えて通っており、県内でも交通基盤の整った地域であることから、宅地や京阪神や中京を流通圏とする工業団地として開発されてきました。

丘陵は北側が鈴鹿山地から延びる水口丘陵の西端にあたり、南側は湖南アルプスと称される山々が連なる山塊地です。山地は花崗岩でできているため風化が著しく、特に南側の山地から流れる小河川は多量の土砂を丘陵と低地に供給し、大沙川・由良谷川・家棟川などの天井川を形成しました。

3. 発掘調査の概要

今回の発掘調査によって、遺跡の範囲が北へ広がることが判明しました。今回の調査範囲は、地形的には標高が5m以上の比高差があり、調査で得られた遺構・遺物の内容も、それに応じて変化する結果となりました。特に標高が高い調査区では、炭や焼土を含んだ遺物包含層が厚く堆積しており、多くの遺物が出土しています。

① 遺構

最も標高が高い調査区では、古墳時代後期の竪穴住居を確認しました。狐栗古墳

群^{註1} とほぼ同時期の集落を発見したことになります。続く古代の遺物は若干量出土するものの、当該期の遺構は検出していません。調査地周辺のこの時期の遺跡としては、直線距離で 1km 離れた野洲川河畔の井戸遺跡^{註2} が挙げられます。人々の活動範囲がこの時期には河畔の平地に移動したと考えることが可能です。中世になると瓦器や黒色土器など 13 世紀後半から 14 世紀前半の遺物が出土しており、柱穴や溝などの遺構を検出しました。再び当地での活動が再開されたこととなります。

標高が徐々に低くなる東側調査区中央部では、16 世紀前半以降に埋没したと判断した堀・溝など中世の遺構を検出しましたが、それ以前の遺構は確認できていません。これらは針氏城が機能していた時代の遺構です。

最も標高が低い調査区東端は丘陵裾の湿潤な地帯で、18 世紀頃の井戸・集水遺構・埋設桶跡・石組遺構・廃棄土坑など近世の遺構が主体となっています。東海道沿いに繁栄した針集落の実態を示すものと言えるでしょう。

なお、近世の遺構からは石匙や磨石など縄文時代の石器が出土していますが、縄文時代の遺構は検出していません。これらの遺物は、今回の調査区の東側で平成 20 年度に実施した発掘調査^{註3} において確認された縄文時代の遺構・遺物に関連するものとして理解できます。

② 遺物

遺物包含層からは、大量の須恵器のほか、土製紡錘車、製塩土器、有孔円板、籠目土器など注目すべき遺物が出土しています。

まず、古墳時代の土器については、南に隣接する狐栗古墳群との関係を考えざるを得ません。特に須恵器の器台など古墳の副葬品と想定できる器形が含まれており、より高所となる南側にはかつて古墳が存在していたことを示しているといえます。また、竪穴住居内からは土製紡錘車が出土しました。土師質で一般に算盤玉形と呼ばれるものとは焼成や形態が異なりますが、算盤玉形土製品として捉えることが可能であれば、狐栗古墳群の造営集団について考えるための新たな資料を得たと言えるでしょう。

次に、製塩土器では、針氏城遺跡に近い出土例として野洲川下流域の栗東市岩畑遺跡・辻遺跡・岡遺跡、守山市横江遺跡・吉身北遺跡・古高遺跡、野洲市市三宅遺跡など各地域の中核的な集落と想定される遺跡が挙げられます。5・6 世紀を相前後する時期の薄手・小型の製塩土器は、塩とともに持ち込まれ中核的な集落で加工され、さらに周辺の各集落に祭祀的な行為と結びついて配布された可能性があると考えられています^{註4}。今回出土した製塩土器は可能性があるものも含めて 3 点にとどまることから、中核的な集落から配布を受けたものと考えられるでしょう。

有孔円板や管玉などの滑石製品や手捏土器・小型土器などの祭祀遺物については、近年、水辺の祭祀の観点で語られることが多いですが、峠などの境界や交通の祭祀にも用いられるものです。今回は地形的には湧水や河川のない調査区からの出土したことを考えると、当地で交通に伴う祭祀が行われていたと考えることもできるでしょう。古代東海道は現集落よりも北側（野洲川寄り）に想定されていますが、この付近を通過していたことに変わりはなく、古代東海道が敷設される前提条件として、より古い交通路が当地を通過していたと考えることが可能です。

籠目土器は、3世紀後半から4世紀前半に近畿地方を中心に分布し、5世紀後半から6世紀中頃にかけて三河・遠江地方を中心に茨城県から福岡県までごく一般的に見られるようになるといわれています^{註5}。早い段階では祭祀遺構から出土することが多いことから祭祀用遺物としての機能が想定され、広く分布するようになる段階では住居跡からの出土が目立つようになります。今回出土したものは、器形が判別できない小片で詳細な時期も不明ですが、他に祭祀遺物が存在することからこれに関連付けることも可能です。さらに交通路の存在を前提に考えると、籠目土器の波及・拡散のルートを示すものともいえるでしょう。

製塩土器についても同じように交通・交易のルート上の遺跡からの出土と考えると、無理なく理解できます。緑釉緑彩陶器^{註6}についても、東海と京都を結ぶルートでの出土例として、籠目土器の場合と同じように理解できるでしょう。

4. まとめ

遺跡の名称でもある針氏城に係する遺構としては、堀や溝が見つかりました。丘陵裾の落ち込みも、ある時期には手が加えられて堀としての性格・機能が与えられていた可能性を知ることができました。『江州佐々木南北諸氏帳』・『芥川氏正徳二年自記 甲賀古土之事』に記載のある五十三家のうち、湖南市域に住んでいたとされるのは、針氏の他に夏見氏・岩根氏・宮島氏・三雲氏で、下田氏・青木氏・谷氏・朝国氏・石部氏も当地域に住んでいたと想定されています。湖南市域には、針氏城や針城をあわせて23か所の中世城郭が分布しており、これらは野洲川兩岸の丘陵に、主要交通路である東海道・信楽越えや野洲川を眼下に見渡すことができる立地に築かれていることが特徴です。文献資料などから城主が比定されている城郭が多いなかで、発掘調査で遺物が出土したのは夏見城^{註7}に次いで2例目です。

さらに、古墳時代の竪穴住居が見つかりましたが、これまで湖南市域の古墳時代集落遺跡は井戸遺跡が知られるのみでした。調査区の南に隣接する狐栗古墳群との関わりも解明すべき課題です。また、管玉・有孔円板・手捏土器などの祭祀遺物や

製塩土器の存在は、倉歴道を含めた古代東海道敷設以前の道の存在を示唆するものといえます。

近世の井戸や集水遺構には、山肌を流れてくる水を集めるための工夫がみられました。これらは、街道沿いに展開する集落の維持・繁栄には生活用水確保が必要不可欠であったことを如実に物語っています。

また、遺物包含層から出土した遺物には、古墳時代から中世までの遺物が細かな炭や焼け土に混じって出土しています。遺跡の東西には天井川である家棟川と由良谷川が北に向かって流れていますが、両河川とも上流は花崗岩からなる山地で、ひとたび大雨が降ると下流に大量の土砂を供給したため天井川となりました。調査では土石流の痕跡は確認できませんでしたが、幅広い時代の遺物を含むこの層は、西調査区では高所から低所に堆積する状況を確認しています。このことから、丘陵先端の緩斜面上に展開していた古墳や建物などが、自然災害により低所に押し流されたものと考えられます。古代の遺構が確認できなかったことも、環境変化に起因していったんこの地を離れざるを得なかったことを表しているのかもしれない。

今回の調査成果からは、急速に天井川化した河川に囲まれ、自然環境的には決して安定していたとは言えない場所でありながら、主要交通路に隣接するがために繁栄と衰退を繰り返した遺跡とこれを営んだ人々の姿を垣間見ることができたと言えるでしょう。

(大崎康文)

註

1. 滋賀県教育委員会 1968 『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』 滋賀県文化財調査概要第 6 集
2. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010 『井戸遺跡』 ほ整備関係 (経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書 37-3
3. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2011 『針氏城遺跡・井戸遺跡』 ほ整備関係 (経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書 38-2
4. 用田政晴 「9 滋賀県」 『日本土器製塩研究』 近藤義郎編 1994
5. 鐘方正樹・角南聡一郎 1997 「籠目土器と笄形土製品」 『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』 奈良市教育委員会
6. 緑釉陶器の陰刻花文は東海、緑彩は畿内の特徴であるが、9 世紀後半になると山城で陰刻文様が・東海で緑彩がそれぞれ用いられるようになる。これが双方の人を介した技術伝習をとまなうものかどうか今後の課題であるとのことである。(高橋照彦 1995 「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」 『国立歴史民俗博物館研究報告第 60 集』)
2. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2011 『夏見城遺跡』 ほ整備関係 (経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書 38-3

参考文献：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2012 『針氏城遺跡 2』 ほ整備関係 (経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書 39-1 (3 月刊行予定)

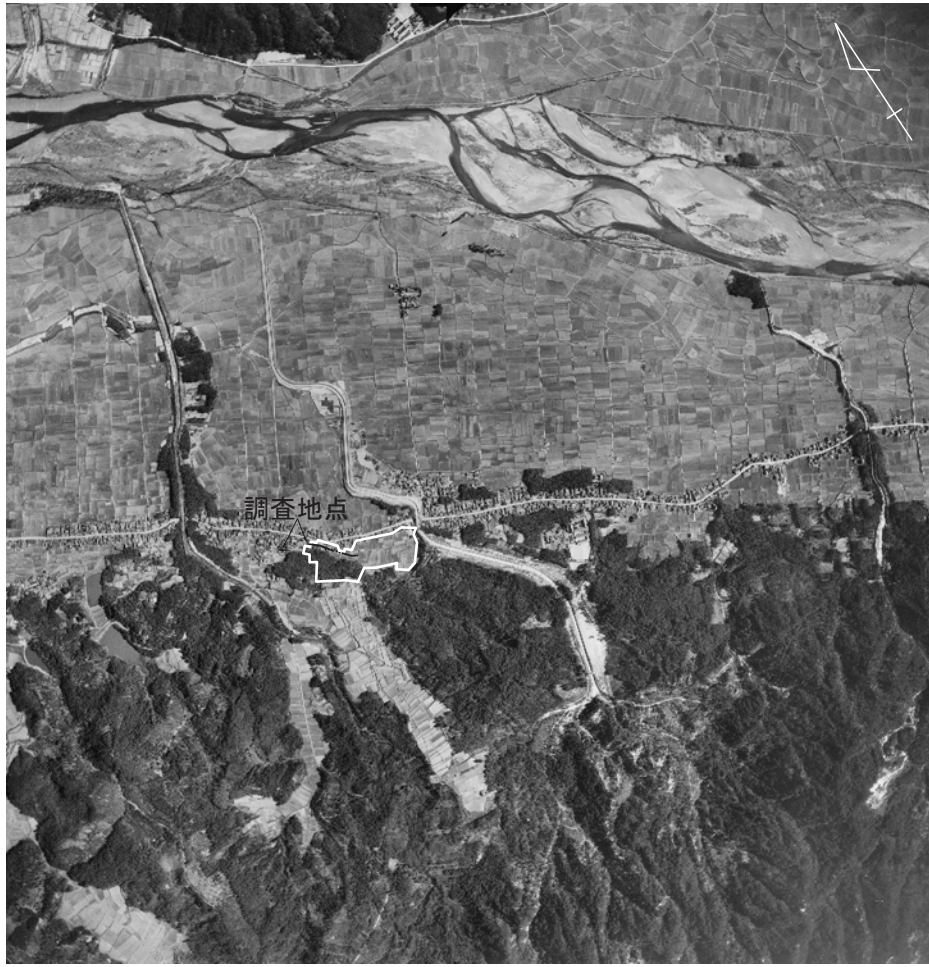


写真1 1948年撮影 (国土地理院 USA_R_1267_51) の遺跡周辺航空写真



写真2 2005年撮影 (国際日本文化研センター 「ラージマップ-高精細空中図版 WebGIS-J」) の遺跡周辺航空写真

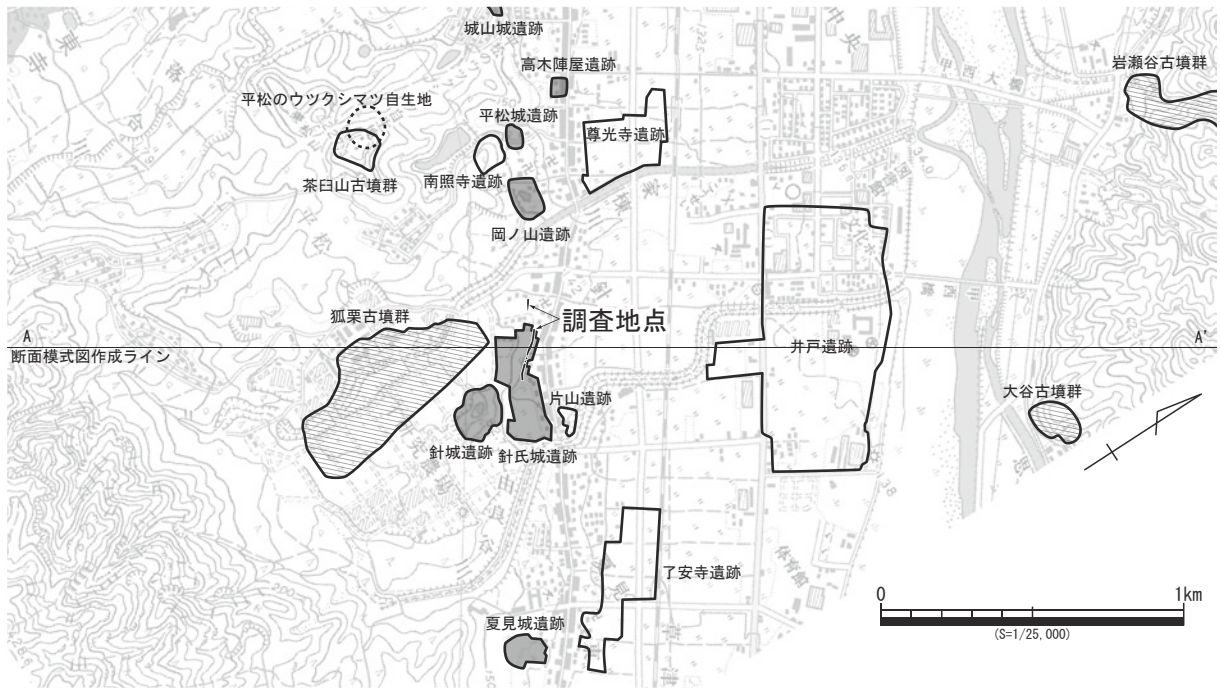


図1 針氏城遺跡位置図

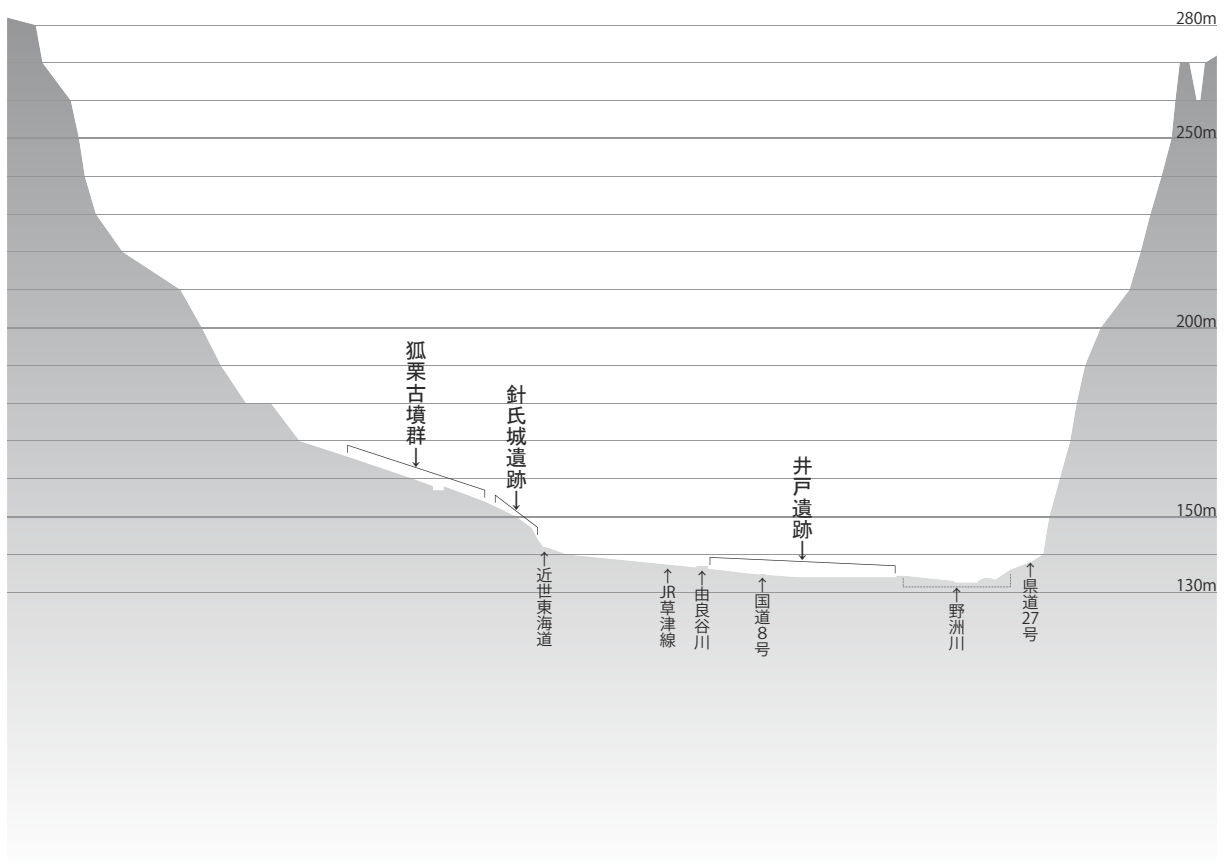


図2 針氏城遺跡周辺地形断面模式

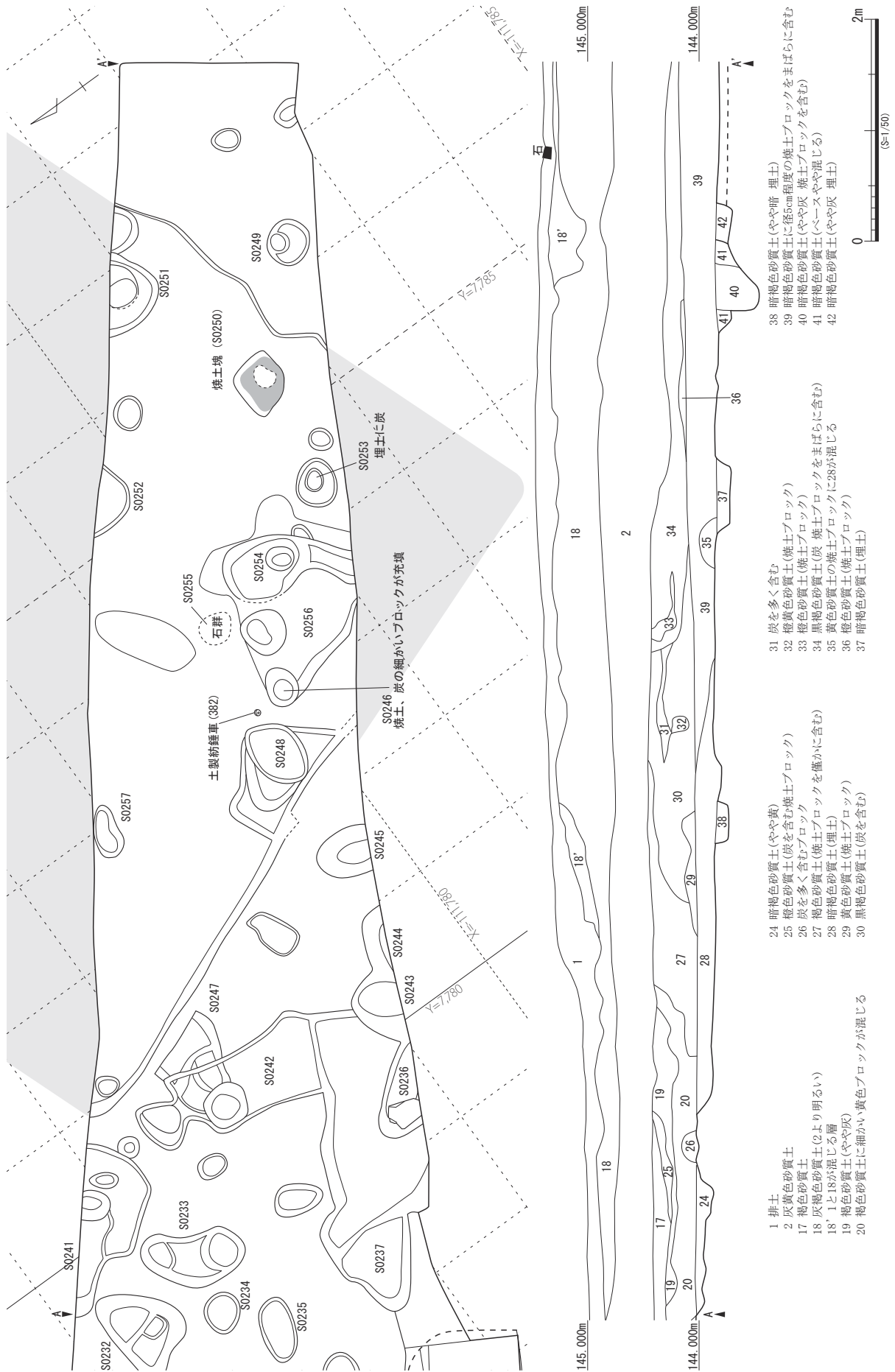
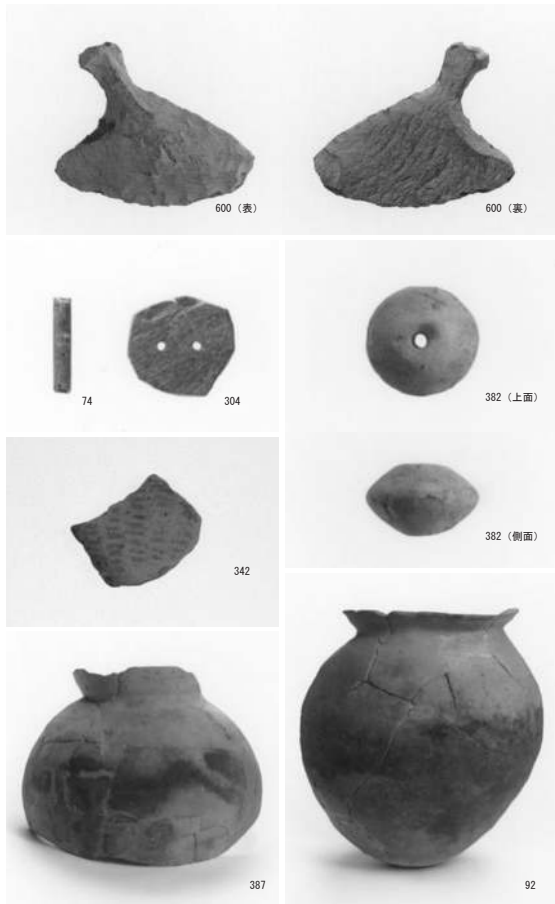


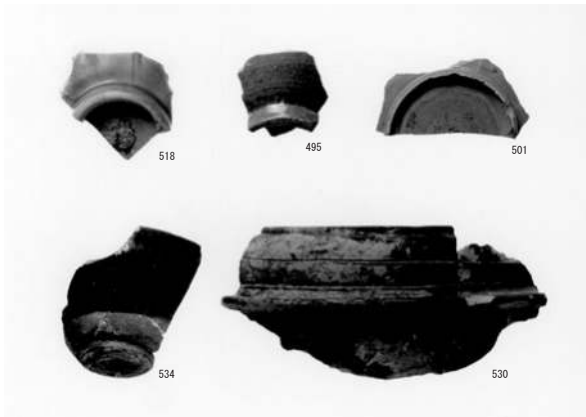
図3 遺物包含層の状況と古墳時代の竪穴住居



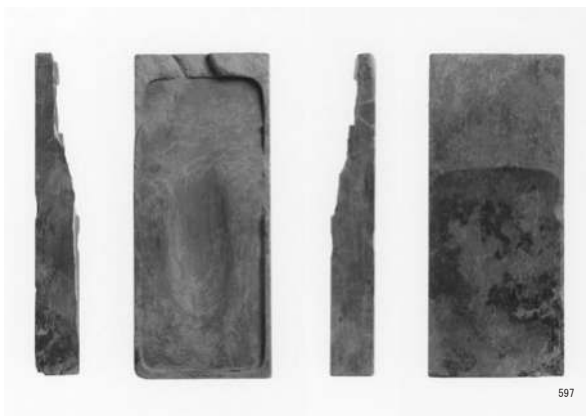
石匙 (600)、管玉 (74)、有孔円板 (304)、土製紡錘車 (382)、土師器籠目土器 (342)・甕 (92・387)



土師器小型丸底壺 (384)、須恵器蓋 (373・401・413)・杯 (200・210) 緑釉緑彩陶器壺 (175)、信楽甕 (653)



青磁碗・天目茶碗・瓦質羽釜



播鉢 (527・528)、甕 (662)、天目茶碗 (622)、横櫛 (644)、急須 (587)、鍋 (588)、仏花瓶 (596)、皿 (664)

写真3 出土した遺物

◆成果報告 2 清滝寺遺跡—京極家菩提寺関係遺跡—

土石流多発地域に営まれた武家の名門・京極氏の菩提寺に関わる新知見

1. 清滝寺遺跡の位置

清滝寺遺跡は、京極家の菩提寺「清瀧寺」を主体とする遺跡として知られています。同遺跡のある米原市は滋賀県の北東部に位置し、西を琵琶湖、北東部を伊吹山系、南東部を鈴鹿山系に囲まれています。この山間を古代から複数の主要道が走り、交通の要衝とされてきました。中世には畿内と東海を結ぶ東山道、畿内と北陸を結ぶ北国街道、北陸と東海を結ぶ越前路の3つの街道が通っていました。京極氏関係の寺院や城館は県内でもこの米原市域に集中しており、同遺跡は東山道に近接する清滝山の南山裾に広がっています。現代では近江の柏原というと「柏原宿」をイメージしますが、かつての柏原の中心はここ清滝でした。

2. 清瀧寺と京極氏

京極氏の始まりは、鎌倉時代中頃にさかのぼります。宇多天皇の流れをくむといわれる佐々木氏は信綱のぶつなの時に分家し、四男・氏信うじのぶは近江愛知川以北六郡と近江柏原の館とともに京都京極に屋敷を与えられたことから、京極氏を名乗ります。初代・氏信は館のある清滝に清瀧寺を創建し、以後同寺は京極家の菩提寺となります。

室町時代に入ると有数の守護家として幕府の要職に就くなど本家の六角氏をしのぐ勢いをつけ、京極持清もちきよの頃には隆盛を極めます。しかし、室町時代後半、持清の死後に継承問題で内紛が起き、家臣団のクーデターが勃発して京極氏は実権を失います。

戦国時代に入り、衰退した京極氏を立て直したのは京極高次たかつぐです。高次は若狭小浜城主となりますが、墓は清瀧寺につくられます。子の忠高ただたかは松江さらに播磨龍野に転封となります。嫡子がないことで絶家となりますが、その危機を逃れて京極高和たかかずが讃岐丸亀藩主となり、清瀧寺の整備に着手します。子の高豊たかとよは播磨二村を幕府に返上して替わりに清滝・大野木の一部を清瀧寺の寺領として得ます。そして歴代の墓所を整備して位牌堂を建て、三重塔を建立して、「徳源院」を建設し、十二坊を整備します。以後、徳源院は整備されつつ、現在の「清瀧寺徳源院」となります。

3. 調査の結果

平成20年度からはじまった発掘調査では、室町時代後半から江戸時代前半の複数

時期の、大規模土木工事をともなう平坦地や建物、供養塔である五輪塔を使った井戸、参道などがみつかりました。みつかった遺物には、輸入陶器、瓶子、香炉等の土器や、鉄釘、仏具等の金属製品などがあり、武家の名門を偲ぶものです。

これらには京極持清の頃のもの、高次の頃のもの、忠高の頃のものがあります。土木量は非常に大きく、山の斜面地を削って低い方に盛り、石積で土留めをし、平坦地を造成していました。特に持清の頃は清瀧寺徳源院の南側で度々造作がなされており、こうした大規模な土木工事を行うことができた京極氏の経済力と権力が容易に想像されます。

調査地の最も東側では、高次の頃の建物群、井戸などがみつかりました。続く、忠高の頃には清瀧寺参道とそれに北面した建物などもみつかりました。

またこれらは山裾に設けられていたため、度々土砂崩れ等があった様子が見えます。平坦地では何度も修復をし、みつかった建物や井戸の上には落石や土砂が覆っていました。参道も土砂で埋まった建物の上につくられています

4. 調査の成果

①清瀧寺、同寺と京極氏との関わりについては、これまで文書や伝承などから研究されていましたが、今回の発掘調査は、清瀧所在の京極氏関係遺跡について考古学的検証のメスを入れることができた初例となりました。

②京極氏と清瀧寺は初代氏信以降七百年あまり続いています。具体的なことはあまりわかっていませんでした。今回の調査によって、京極高豊の整備以前に、京極持清から京極忠高へとつながっていく複数時期の造作が確認できました。

③遺構とともにみつかった遺物は権威・権力を示すものが多く、武家の名門をイメージするものでした。

5. おわりに

調査では清瀧寺と京極氏をめぐる諸問題のうちのいくつかを解明できましたが、同寺の位置や伽藍配置などの実態、十二坊の実像、京極氏の菩提寺やほかの諸施設等との関係を含めて、清瀧寺をどのような規模・形態・配置構造と捉えるのかなど残された問題も多く、今後の調査・研究課題といえます。 (中川治美)

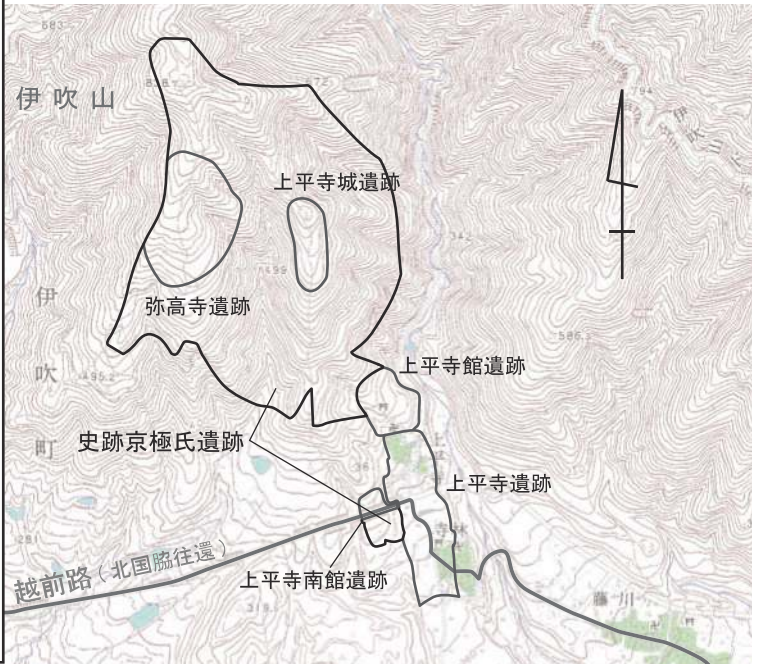
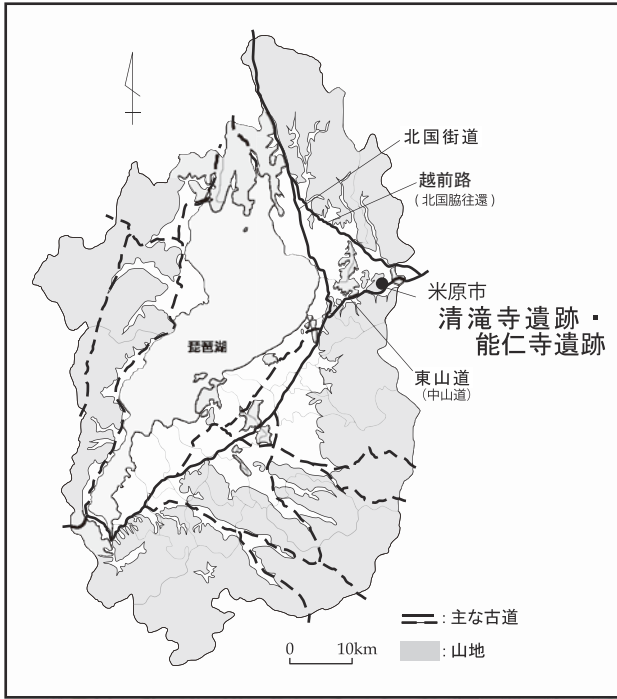
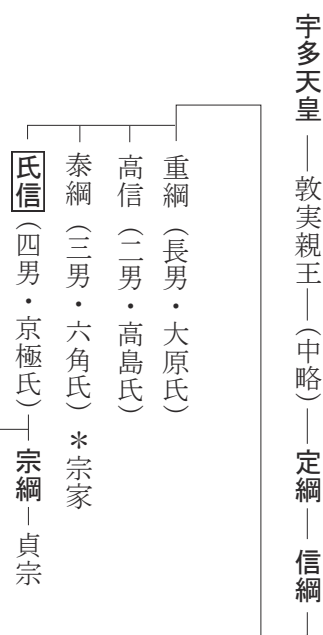


図1 清滝寺遺跡の位置

◇ 佐々木氏・京極氏系図



◇ 近世京極氏系図

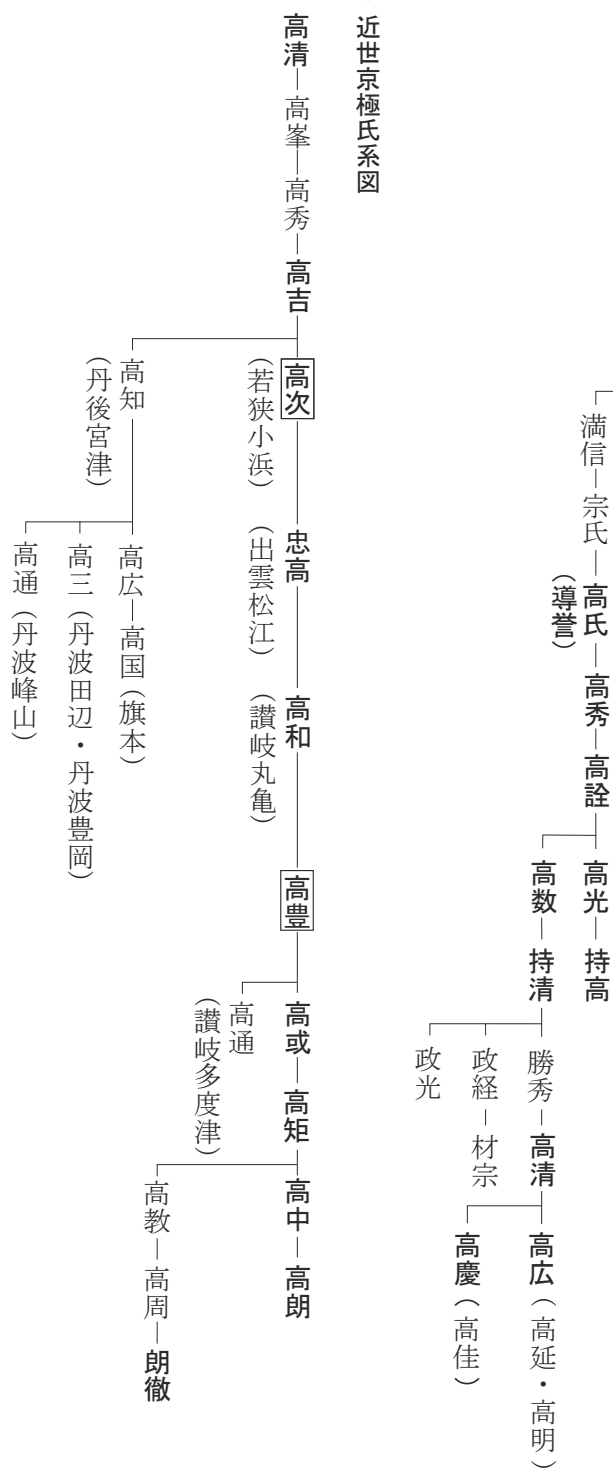


図2 京極氏系図 (参考文献より)

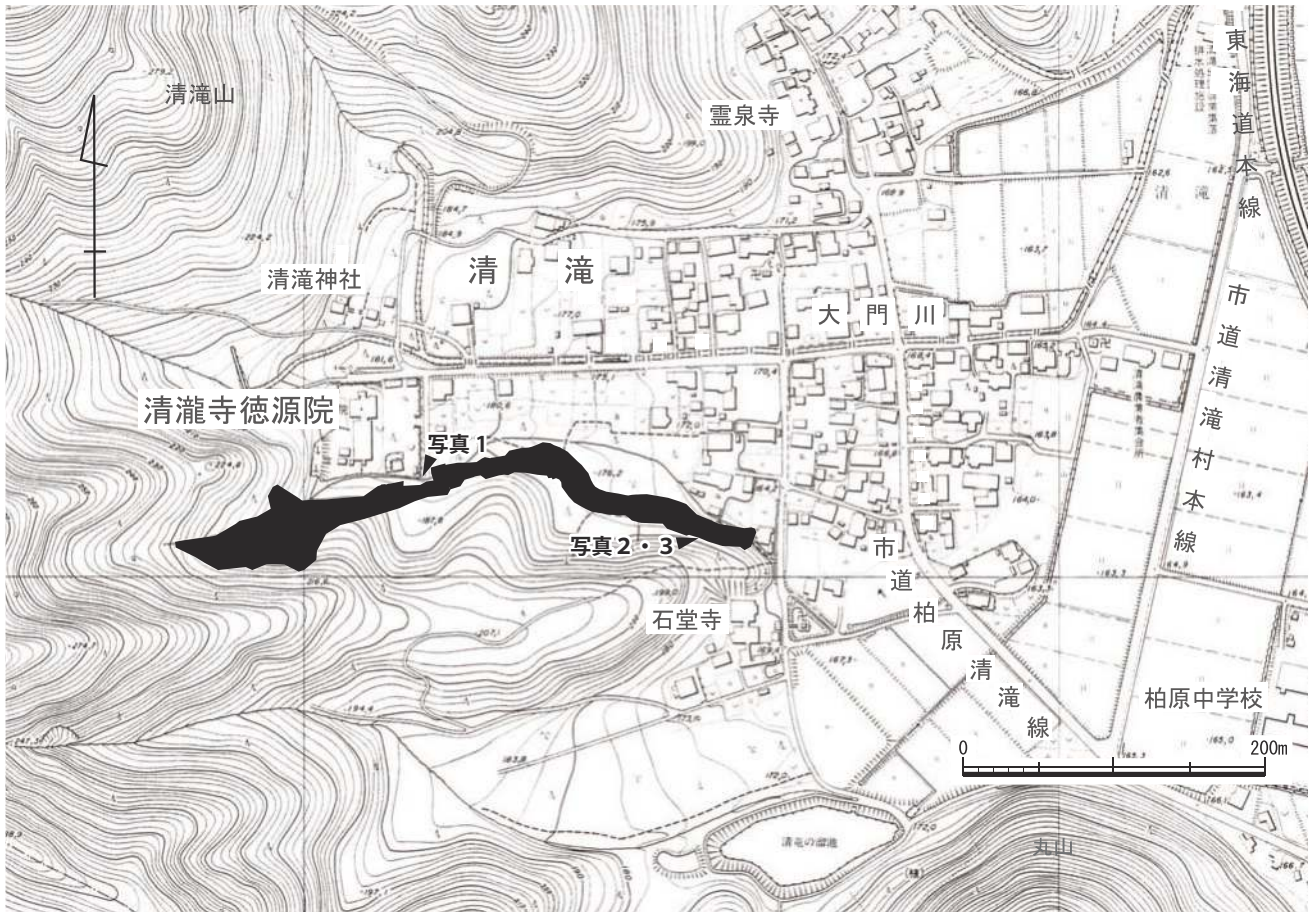


図3 調査地とその周辺



写真1 徳源院の南側でみつかった平坦地 土留めの石積がみつかりました



写真2 最も東の平坦地 高次の頃の建物群・井戸、忠高の頃の清瀧寺参道などが見つかりました



写真3 井戸 50個ほどの五輪塔（火輪）が井戸枠としてつかわれていました

◆特別報告

発掘調査からみる湖国の地震と人々の暮らし

—県内 25 か所にのぼる地震跡から読み取る警鐘と知恵—

1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災は、地震と津波による未曾有の大災害をもたらしました。一刻も早い復興を願うものです。今回の「東北地方太平洋沖地震」のメカニズムは、宮城県沖での太平洋プレートと北アメリカプレート2つのプレートのせめぎあいから起こる「プレート境界型地震」などと呼ばれるものです。1995年1月17日に発生した「兵庫県南部地震」は「活断層型地震」と呼ばれ、内陸の活断層の活動で発生したものです。琵琶湖周辺では大小の活断層が琵琶湖の湖底を含め20か所以上存在します。活断層の最終の活動期やその周期を解明することは地震予知につながります。

遺跡の発掘調査で見つかる地震跡には、液状化に伴う噴砂^{ふんさ}、地割れ、断層、浮上りなどがあります。もっとも発見しやすい地震跡は噴砂の砂脈です。県内で見つかった地震跡は、これまで25か所で確認されています。発掘調査では古文書などの記録に残されていない地震跡が見つかる例が多く、今後の地震予知にも寄与するものです。主な調査例や最新の事例を、時代別に紹介します。

2. 縄文時代の地震跡

津田江湖底遺跡は草津市津田江地先の琵琶湖湖岸に位置する湖底遺跡で、断面にいくつかの液状化に伴う噴砂の痕跡が確認されています。噴砂が確認された地層は縄文時代前期後葉から中期前半の土器を含む遺物包含層を切り、縄文時代後期の土器片を含む包含層に覆われています。

今津町教育委員会（現高島市教育委員会）が調査した高島市北仰^{きとげにしかいどう}西海道遺跡は、地震考古学発祥の遺跡です。検出された噴砂の砂脈は滋賀里Ⅱ式の土器を含む土坑墓を切り裂き、滋賀里ⅢB式の土器棺墓に覆われることから縄文時代晩期前半の時期に限定されます。

3. 弥生時代の地震跡

弥生時代の地震跡は、6遺跡で見つかっています。草津市烏丸崎^{からすまざき}遺跡では、現在の琵琶湖博物館入口付近の湖岸道路付近でいくつかの液状化に伴う噴砂の砂脈が見

つかっています。1か所では幅1m、長さ10m以上の砂脈が数条見つかると、この砂脈は弥生時代前期中葉の竪穴式住居跡を切り裂き弥生時代中期後葉の土器を含む土坑に切られています。

野洲市湯ノ部遺跡でも弥生時代前期の竪穴式住居に噴砂の砂脈が見つかっています。この竪穴式住居は、弥生時代前期後葉の土器を含む円形の壁溝を持つ焼失住居で、幅10cmほどの砂脈が壁溝から中央土坑を切り裂いています。

高島市新旭町針江浜遺跡は湖岸から約200m沖にある遺跡で、現水面下2m付近で液状化による無数の砂脈のほか、直径が50～80cmのヤナギの倒木が10数本出土しました。噴砂を検出した面に弥生時代中期前半の土器が出土していることから、この時期の地震と推定されます。弥生時代に起こった地震の震源地については、地震学者の寒川旭氏は湖西の饗庭野断層や花折断層の南部と推定しています。

4. 古墳時代の地震跡

古墳時代以降の地震跡は、4遺跡で見つかっています。栗東市下鉤遺跡では古墳時代後期の土器を含む溝の底に砂脈が見つかっています。愛荘町長野遺跡では土師器片を含む土坑に噴砂が噴き出しています。草津市襖遺跡では液状化による噴砂が見つかっています。通常、液状化する地層は水分を含む砂層ですが、襖遺跡では砂礫層から噴砂が起こっている珍しい例です。堅田断層に近い苗鹿遺跡では地割れ痕が見つかっています。

5. 中世の地震跡

平安時代以降では、大津市穴太遺跡の平安時代の遺構面にいくつかの砂脈が走っています。断面でみると、幅3cmの砂脈が深さ50cmの砂層から上層の砂層を切り裂いて噴出していることがよくわかります。また、日野町五斗井遺跡の事例からは、山麓に近い台地でも液状化が発生したことを示しています。平安時代の遺構面に堆積した地層がくい違い（断層）を起こしています。このくい違い（断層）は上下20cmほどの差であり、液状化により噴出した砂や水で地層の密度が薄くなり、その部分が陥没し発生したものです。

鎌倉時代以降では、琵琶湖博物館の進入路付近で見つかった草津市烏丸崎遺跡の断層跡、近江八幡市加茂遺跡の無数の砂脈などがあります。このほか彦根市金田遺跡の噴砂、栗東市野尻遺跡の噴砂などがあります。彦根市八坂東遺跡では、液状化による砂脈や地震が原因と思われる井戸枠の横ずれが見つかっています。積み重ねた曲物桶の上下が横にずれているもので、液状化した地層が地下水位の高い井戸に

集中して発生したと考えられます。

5. 近世の地震跡

瀬田川川底で見つかった大津市^{ほたるだに}蛸谷遺跡の噴砂は、大きさ長径 2.6 mほどの楕円形で、深さ 1.6 m以上の地層から噴出した断面が逆台形の青灰色砂です。この噴砂は平安時代の包含層を切っていることから、平安時代以降の地震の可能性が推定され、最も可能性の高いのは寛文 2 年（1662）の地震で、この地震により膳所城では本丸の石垣などが崩壊し、修復後本丸と二ノ丸が合体しています。

野洲市^{つつみ}堤遺跡でも、旧野洲川の堤防に大規模な噴砂の断面が見つっています。

近江八幡市安土町^{だいなか こみなみ}の大中の湖南遺跡では、7 世紀から 8 世紀代の木材と石材で構築された突堤が 3 基見つかかり、その突堤の石材を囲う長さ約 4.5 m の側板や長さ約 1.8 m の杭が「浮上り」現象を起こしていました。「浮上り」は液状化現象で上層の軟弱な地層と共に杭などの構造物も浮上る現象です。東日本大震災では千葉県浦安市周辺で道路わきのマンホールが 1 m 近く盛上った写真がありましたが、これと同じ現象が発生したものです。浮上がった地層に含まれる土器から、地震の時期は江戸時代とされています。

長浜市^{ながはまちょう}長浜町遺跡では、天正地震と寛文地震の被害跡が見つっています。天正地震の時期で一面焼土層に覆われ、遺構面が波打ち、陥没している部分も見つっています。焼土は地震による火災の発生で形成されたもので、天正 13 年（1586）11 月 29 日曆に、現在の岐阜県北西部を震源とするマグニチュード 7.9 クラスの大地震が起こった記録がいくつか残されています。2006 年放映の NHK 大河ドラマ「功名が辻」ではこの地震で山内一豊の一人娘の与祢^{よね}が建物の下敷きとなって命を落とすシーンもありました。ルイス フロイスがあらわした『日本史』にも長浜城下町が壊滅したことや、湖岸に近い長浜市下坂の集落が津波で破壊された記録が記されています。

6. 塩津港遺跡と琵琶湖の津波

最近の調査例として、長浜市西浅井町^{しおつこう}塩津港遺跡の地震跡と琵琶湖の津波について報告します。塩津港遺跡の地震跡は、平安時代後期の文献史料と出土木簡から時期が限定できる地震跡です。地震の痕跡は、平安時代後期の神社遺構の遺構面に液状化に伴う幾つかの噴砂や地割れとして検出されました。また、本殿脇の掘立柱建物の柱根の多くが北に数度傾いていることや、神社の御神体である神像や社殿の建築部材などが背後の北側堀跡に倒壊していたことが、琵琶湖に発生した津波による

ものと推定されています。山中忠親^{ただちか}の日記『山槐記』^{さんかい}や、鴨長明の随筆『方丈記』にも「地震で琵琶湖の水が北流した」と記されており、琵琶湖においても小規模ながら津波が発生したようです。この地震の震源地は京都・滋賀の県境付近とされ、琵琶湖西岸断層の南に位置する堅田断層が活動し、その規模はマグニチュード 7.4 と推定されています。

7. おわりに

滋賀県内には、今後地震を引き起こす可能性が高い活断層として琵琶湖西岸断層帯があります。平成 21 年 8 月の地震調査委員会の一部改訂長期予想では、今後 30 年以内のマグニチュード 7.1 以上の地震発生確率を北部地域では 1～3%、南部地域では 0%と予想しています。平成 15 年の予想では全体に 0.09～9%でした。長期予想には弥生時代の幾つかの地震跡や 1185 年の塩津港遺跡の地震跡などが評価の参考になっています。

発掘された地震跡は、主に琵琶湖周辺で見つかっています。琵琶湖周辺は地下水位が高く地盤が軟弱で、液状化現象が起りやすいためです。一方、鈴鹿山麓の日野町五斗井遺跡でも液状化跡が見つかることから、台地でも地質により液状化現象の発生の可能性があります。阪神淡路大震災や東日本大震災の経験から常日頃から震災の発生に心掛けなければなりません。 (濱 修)

参考資料：寒川晃 1990「湖国の地震考古学(上・下)」『文化財教室シリーズ 114・115』滋賀県文化財保護協会
※『近江の文化財教室 3』として 1995 年に集録

寒川旭 1992『地震考古学』中公新書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2005『芦刈遺跡・大中の湖遺跡』ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書 32-2

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『八坂東遺跡』県立大学人間看護学部整備事業に伴う発掘調査報告書

地震調査研究推進本部地震調査委員会 2009「琵琶湖湖西岸断層帯の長期評価の一部改訂について」

濱 修 2012「地震考古学の発展に向けて」『紀要』財団法人滋賀県文化財保護協会(3月刊行予定)

表1 滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡 (番号は左下図と対応)

※ No.	遺跡名	所在地	担当	調査年	立地	種類	時期	推定規模
○ 1	津田江湖底遺跡	草津市下物町地先	県・協会	1987	湖底	噴砂	縄文時代中～晩期	M 7.5 前後
○ 2	北仰西海遺跡	高島市今津町北仰	高島町	1986	湖岸	噴砂	縄文時代晩期前半中	M 7.5 前後
○ 3	針江浜遺跡	高島市瀬田町針江浜	県・協会	1987～89	湖底	噴砂	弥生時代中期前葉	M 7.5 前後
○ 4	烏丸崎遺跡	草津市下物町地先	県・協会	1987・88	湖岸	噴砂	弥生時代中期前・中葉	M 7.5 前後
5	正言寺遺跡	長浜市南田附町	長浜市	1991	低地	噴砂	弥生時代中期中葉	M 7.5 前後
6	湯ノ部遺跡	野洲市西河原	県・協会	1991	低地	噴砂	弥生時代中期	M 7.5 前後
7	八夫遺跡	野洲市八夫	中主町	1998	低地	噴砂・噴礫	弥生時代中期	M 7.5 前後
8	下之郷遺跡	守山市吉身	守山市	2007	台地	浮上り	弥生時代中期後葉	
9	襖遺跡	草津市御倉	県・協会	1989	三角州	噴礫	古墳時代以降	
10	苗鹿遺跡	大津市苗鹿	大津市	1996	台地	地割れ	古墳時代中期以降	M 7.4～7.6
11	長野遺跡	愛荘町長野	県・協会	2006	平地	噴砂	古墳時代後期以降	
12	下鈎遺跡	栗東市下鈎	県・協会	1999	扇状地	噴砂	古墳時代後期以降	12世紀まで
13	穴太遺跡	大津市穴太	県・協会	1989・90	扇状地	地割れ・噴砂	平安時代以降	M 7.4～7.6
○ 14	五斗井遺跡	蒲生郡野町五斗井	県・協会	1990	山麓	断層・噴砂	平安時代後期以降	M 7.4～7.6
○ 15	蟹谷遺跡	大津市石山寺	県・協会	1984	川底	噴砂	平安時代末以降	M 7.4～7.6
○ 16	塩津港遺跡	長浜市西浅井町塩津浜	県・協会	2007～9	湖岸	噴砂	12世紀後半頃	M 7.4 前後
○ 17	烏丸崎遺跡	草津市下物町地先	県・協会	1991	湖岸	断層・側方移動	13～14世紀以降	M 7.6 前後
18	金田遺跡	彦根市金田町宮前	県・協会	2003	平地	噴砂	13世紀以降	
19	野尻遺跡	栗東市野尻町	栗東市	1991	扇状地	断層・液状化	鎌倉～江戸中期	M 7.6 前後
○ 20	加茂遺跡	近江八幡市加茂町	県・協会	1990	低地	地割れ・噴砂	14世紀中頃以降	M 7.6 前後
○ 21	八坂東遺跡	彦根市八坂町	県・協会	2002・3	湖岸	噴砂・戸ずれ	室町時代以降	
22	長浜町遺跡	長浜市元浜町	長浜市	1996	低地	焼土層	1586(天正13)年・1662(寛文2)年	M 7.8 前後
23	堤遺跡	野洲市堤	中主町	1992	旧堤防	噴砂	江戸時代	M 7.6 前後
○ 24	大中の湖南遺跡	近江八幡市安土町下豊浦	県・協会	2001	湖岸	浮上り	江戸時代	M 7.6 前後
25	吉身西遺跡	守山市守山町	県・協会	1997	台地	断層(彫刻)	不明	

(※：○は資料掲載遺跡)

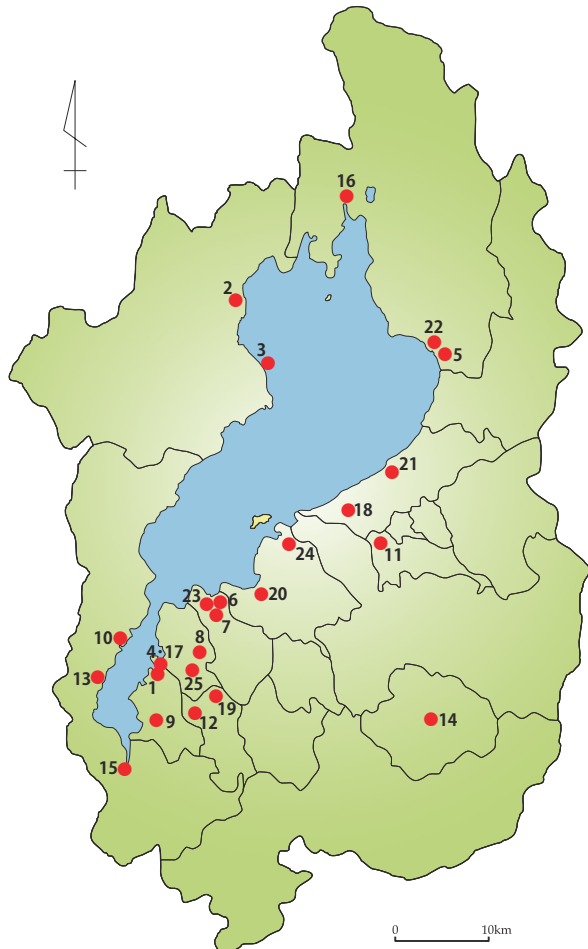


図1 滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡

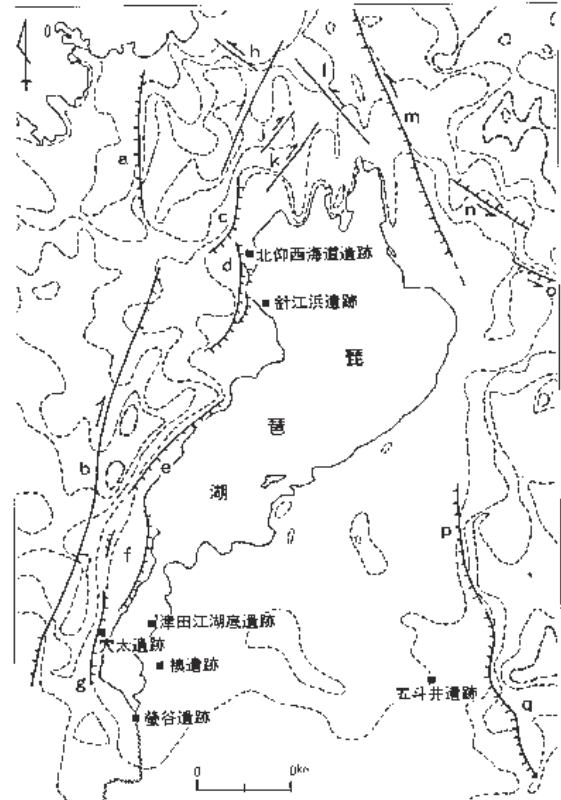


図2 琵琶湖周辺の活断層と地震跡の検出された遺跡

- a: 二方断層 b: 平持断層 c: 池田断層 d: 美濃川断層群
- e: 比叡断層 f: 笠井断層 g: 七瀬断層 h: 野坂断層
- i: 新井断層 j: 坂口断層 k: 路地断層 l: 集知断層
- m: 大ノ湖断層 n: 湯治断層 o: 関ヶ原断層 p: 百酒寺断層
- q: 樺向山断層 l.c: gが琵琶湖西岸断層系!

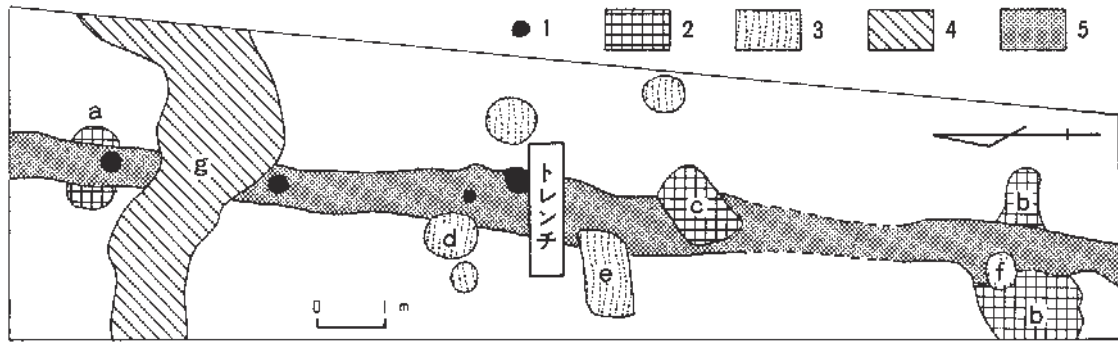
(寒川 1990 より)



津田江湖底遺跡 噴砂 (表No. 1)



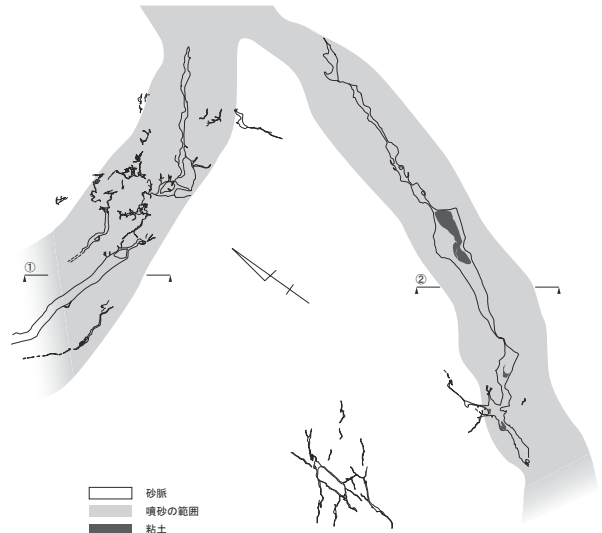
北仰西海道遺跡 噴砂 (表No. 2)



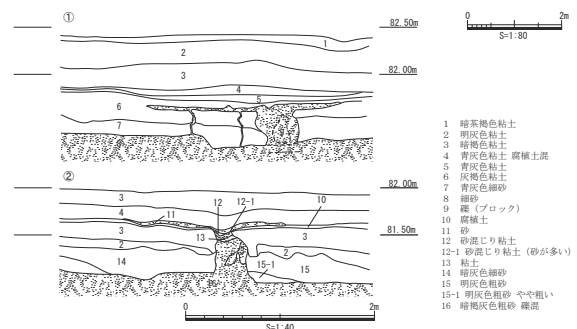
北仰西海道遺跡の砂脈と遺構 (表No. 2) 1: 杭跡 2: 土墳墓 3: 土器棺墓 4: 方形周溝墓 5: 砂脈
(寒川 1990 より)



針江浜遺跡 ヤナギの倒木 (表No. 3)



針江浜遺跡 噴砂 (表No. 3)



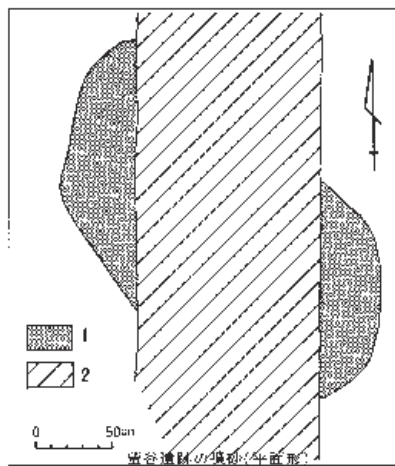
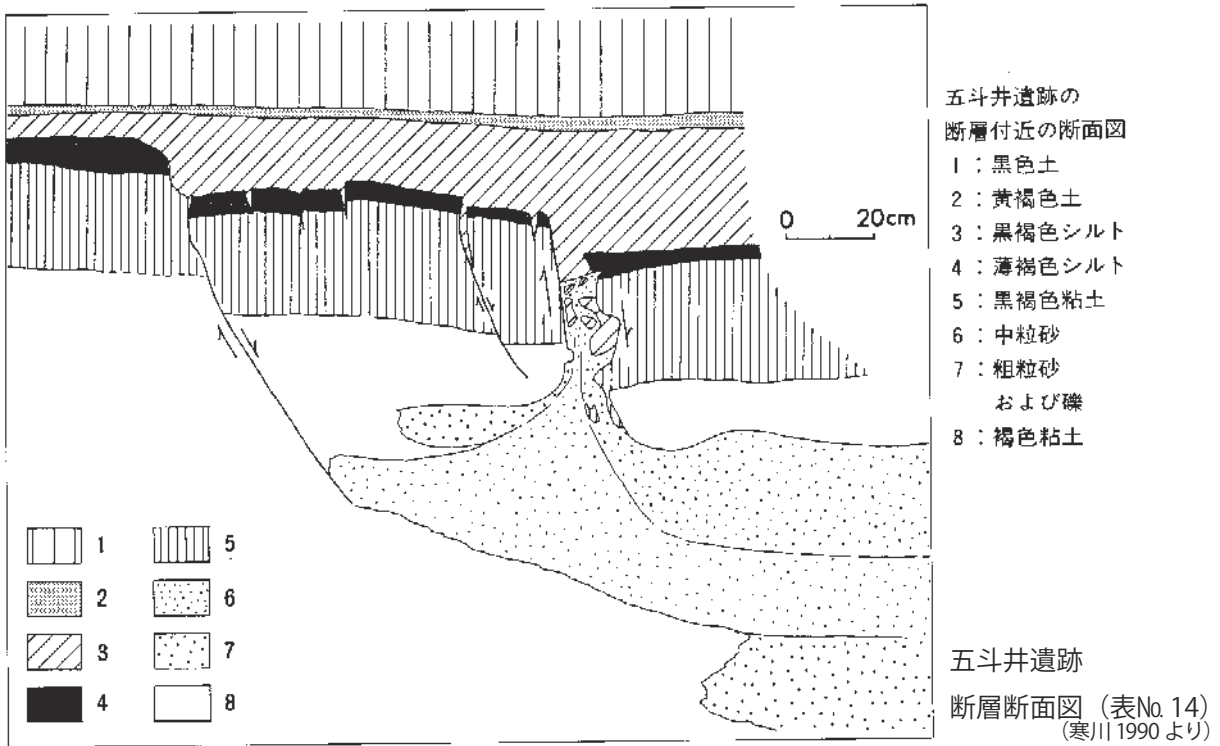
針江浜遺跡の地震跡 (表No. 3)



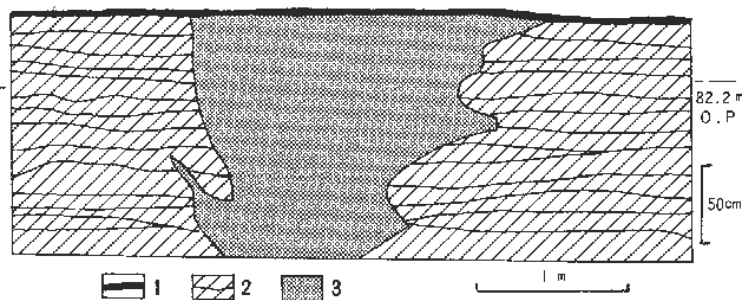
烏丸崎遺跡 竪穴住居を切り裂く噴砂 (表No. 4)



烏丸崎遺跡 逆断層 (表No. 17)



螢谷遺跡 噴砂平面図 (表No. 15)
(寒川1990より)



螢谷遺跡の液状化跡 (断面形)

1 : 黒褐色粘質土
2 : 縄文時代早期末-平安時代末期の遺物包含層
3 : 噴砂

螢谷遺跡 液状化断面図 (表No. 15)
(寒川1990より)



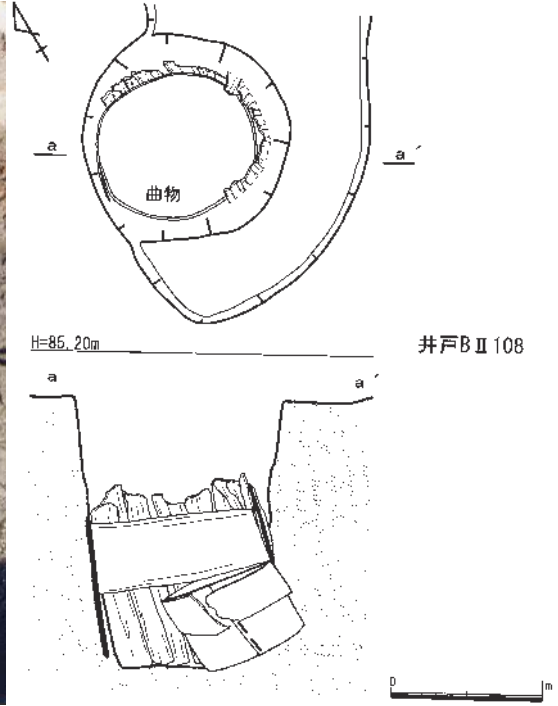
塩津港遺跡 傾いた掘立柱建物の柱 (表No. 16)



塩津港遺跡 噴砂 (表No. 16)



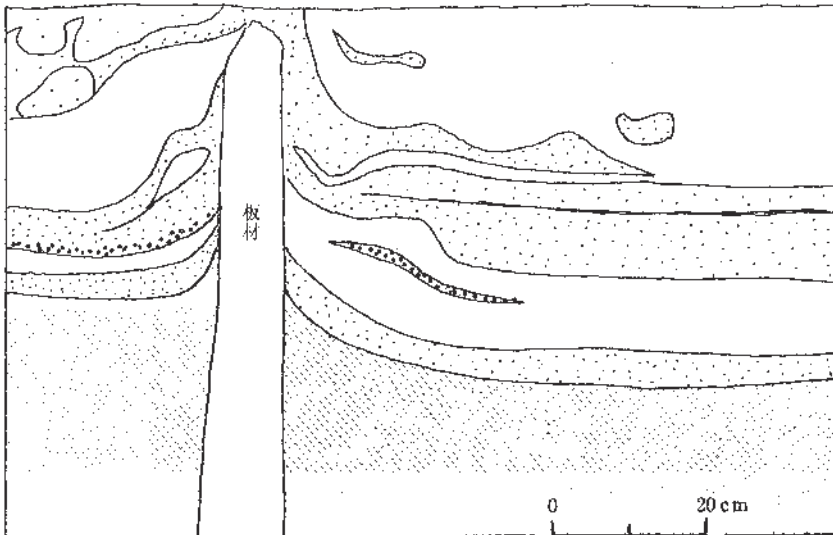
加茂遺跡 噴砂 (表No. 20)



八坂東遺跡 地震でずれた井戸枠 (表No. 21) (報告書より)



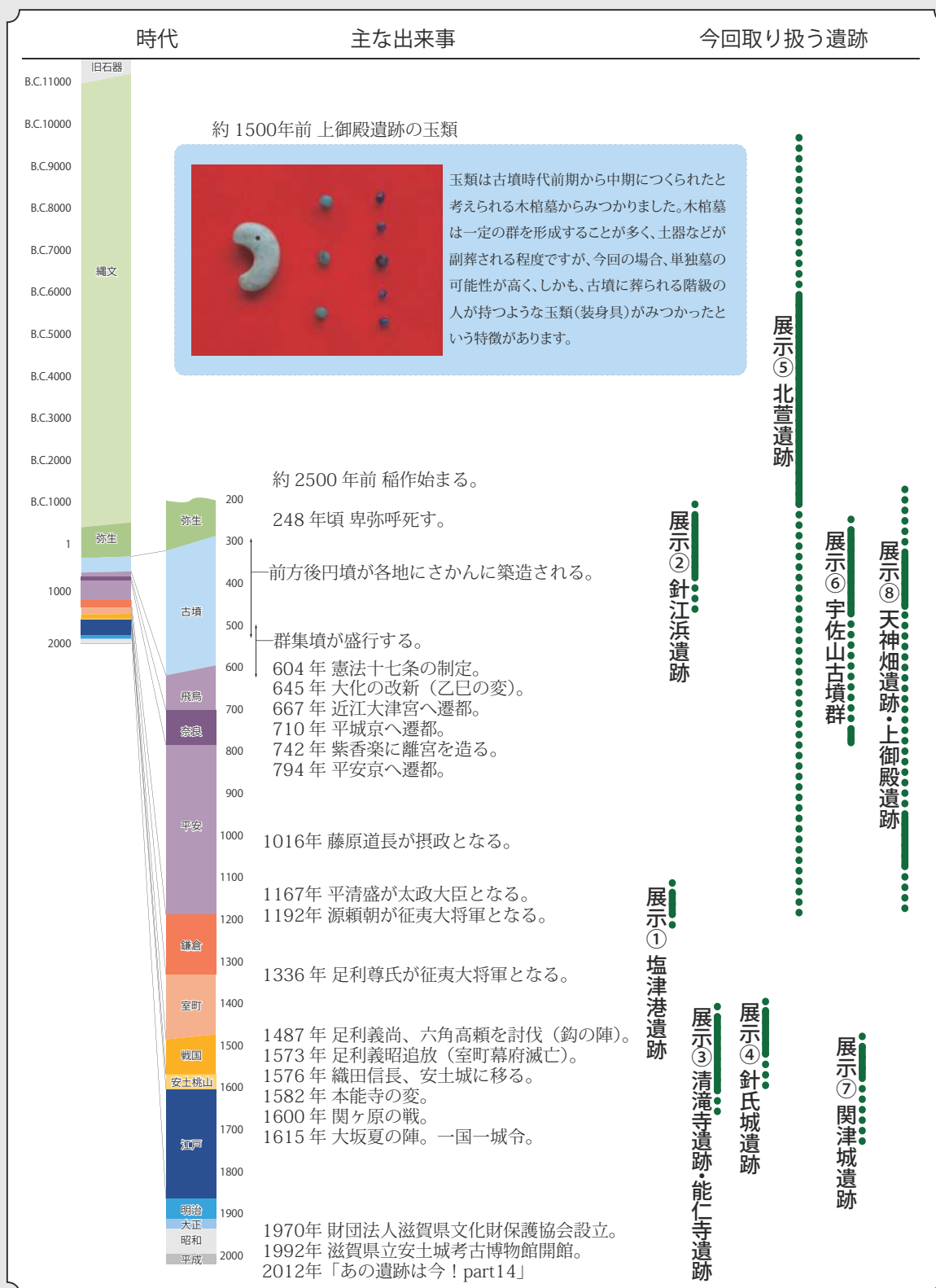
大中の湖南遺跡
地震で浮上した矢板 (表No. 24)



大中の湖南遺跡
柱材の浮上にもなう地層の変形
(表No. 24)
ドットは砂を示し、砂粒の大きさはドットの大きさに対応している。
白抜きの部分はシルト～粘土、アミの部分は植物遺体を多く含む腐植土。(報告書より)

■ 出土品展示解説 ■

今年度に整理調査を行っている遺跡から、8つの遺跡の出土品を展示しました。このうち前半については、報告会のテーマである「災害と人の歴史」に関連した展示解説となっています。



平安時代後期の 地震跡が出土

しおつこう
塩津港遺跡（長浜市西浅井町塩津浜）



塩津港遺跡は、平安時代の後期から末期にかけての神社跡です。これまでの発掘調査により、この神社は約 50m 四方の堀で囲まれ、本殿や拝殿などの主要な遺構をはじめ、井戸跡や鳥居跡があったことも明らかになっています。

さらに、平安時代後期にこの地を襲った地震跡があります。この遺構は、「噴砂」^{ふんさ}と呼ばれる液状化現象の痕跡です。液状化の現象は、通常的地盤は、土砂の摩擦に



湖岸から陸にむかって倒れた柱列

より安定を保っていますが、土壌が砂質でしかも地下水などを過剰に含んでいる場合、地震などの振動により液状化が起こります。そうした痕跡が噴砂跡と呼ばれ県内の遺跡で数多く見つかっています。

塩津港遺跡で見つかった噴砂跡は、「起請文札」^{きしょうもんふだ}に記された年号から 1185 年の「文治の地震」と考えられます。

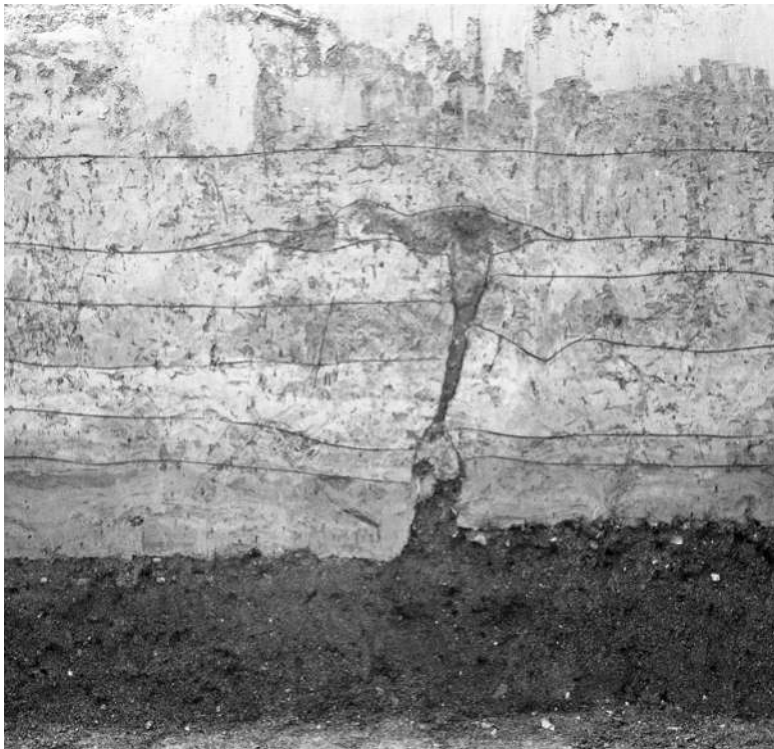
本遺跡からの出土遺物は、「起請文札」をはじめ土師皿、幣串、松明の燃えさしなどがあり、これらの資料は、当時の神社で行われた祀り^{まつ}を考えるとくに重要です。



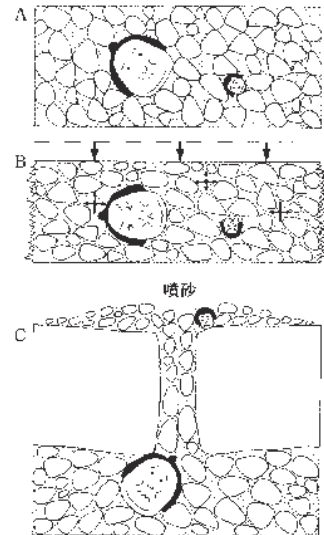
噴砂跡断面

マグニチュード 7.5 級の 噴砂の断面

はりえはま
針江浜遺跡 (高島市新旭町針江)



噴砂の断面



液状化の現象と噴砂

A: 通常の状態での砂粒と地下水 (アミで示した)、

B: 強い地震動によって地層が収縮して液状化現象が発生、

C: 上を覆う地層を引き裂いて、地下水と砂 (噴砂) が地表に流れ出した。

噴砂の模式図

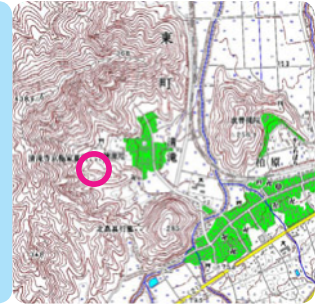
(寒川旭『地震の考古学』より)

地震に伴う圧力で砂と地下水を含んだ地層が液状化し、上層の地層を突き破って砂と水が噴出します。この噴出した砂を「噴砂」と呼びます。東日本大震災では震源から離れた千葉県浦安市の東京ディズニーランド周辺でもたくさんの噴砂が発生し、駐車場が砂で埋まりました。

針江浜遺跡は湖岸から約 200m 沖合にあり、現在の水面下約 2.5 m 付近から弥生時代前期の住居跡、弥生時代中期の溝跡など、古墳時代の耕作地や畦畔が見つかっています。かつて陸地であったところが湖底に沈んでしまった遺跡です。弥生時代中期前半の遺構面に、液状化現象による無数の砂脈や噴砂跡が検出されました。また、この地震により直径 80cm ほどのヤナギの大木が 10 数本倒壊していました。針江浜遺跡の噴砂の特徴は、通常の液状化で噴き上がる地層は粒子の細かい砂ですが、針江浜遺跡では数センチ大の砂礫されきも噴き上がっています。噴砂は幅 10～30cm ほど、噴き上がった高さは 1 m ほど、長さは 20m 以上ありました。このことから、マグニチュード 7.5 級の規模の大きい地震であったことがわかります。

五輪塔の中から 化石みつける

きよたきでら のうにんじ
清滝寺遺跡・能仁寺遺跡（米原市清滝）



清滝寺遺跡は京極家菩提寺関係遺跡で、平成 20 年度からはじまった発掘調査では、室町時代後半から江戸時代前半の土砂崩れ跡や、大規模土木工事をともなう平坦地や建物、供養塔である五輪塔を使った井戸、参道などが見つかっています。

能仁寺遺跡は清滝寺遺跡の一角にあり、京極高詮の菩提寺跡といわれており、調査では室町時代前半の墓や方形基壇を持つ建物、庭園、石垣をともなう参道などと共に、寺名の一文字と思われる「仁」の文字を記した土器などが見つかっています。

これら両遺跡で見つかった遺物には、武家の名門京極氏を偲ぶ輸入陶器、瓶子、香炉等の土器や、鉄釘、仏具等の金属製品などがあります。

さてこのうち、五輪塔（水輪）の表面に原生動物の化石が見つかりました。この水輪の材質は県内でふつうに分布する石灰岩で、遺跡の近くにある伊吹山でも採れます。伊吹山の石灰岩は約 2 億 6 千年前に赤道付近にあった海底火山にサンゴ礁として堆積し、1 億 8 千年前に日本列島の一部となって、現在に至ります。今回みつかったのは、サンゴ礁とともに堆積した「フズリナ」（紡錘虫）の化石です。鉱物の結晶とは異なり、白っぽく渦を巻いた指紋状に見え、大きさは 3mm ぐらいです。

調査でみつかった遺物には考古学的な情報に加えて、絶滅した魚や動物の骨や現在では分布しない植物化石など、人類、生命の歴史を知る上で多様な情報がたくさん詰まっています。



「仁」と記された陶器



五輪塔にみつかった「フズリナ」の化石（拡大）

環境変化を 乗り越えた歴史

はりしじょう
針氏城遺跡（湖南省針）



今回の調査範囲は、地形的には標高が5 m以上の比高差があり、調査で得られた遺構・遺物の内容も、それに応じて変化する結果となりました。特に標高が高い調査区では、炭や焼土を含んだ遺物包含層が厚く堆積しており、古墳時代から中世までの多くの遺物が出土しています。なかでも、大量の須恵器のほか、土製紡錘車、製塩土器、有孔円板、籠目土器かごめなど注目すべき遺物が出土しています。

遺跡の東西に流れる家棟川と由良谷川は、上流が花崗岩からなる山地で、ひとたび大雨が降ると下流に大量の土砂を供給したため天井川てんじょうがわとなりました。調査では土石流の痕跡は確認できませんでしたが、幅広い時代の遺物を含む遺物包含層は、高所から低所にむかって堆積する状況を確認しました。このことから、丘陵先端の緩斜面上に展開していた古墳や建物などが、自然災害により低所に押し流されたものと考えられます。古代の遺構は確認できませんでしたが、環境変化に起因して、いつ

たんこの地を離れざるを得なかったことを表しているのかもしれませんが。

今回の調査成果からは、急速に天井川化した河川に囲まれ、自然環境的には決して安定していたとは言えない場所でありながら、主要交通路に隣接するがために繁栄と衰退を繰り返した遺跡とこれを営んだ人々の姿を垣間見ることができたと言えるでしょう。



製塩土器



滑石製管玉・有孔円板



土師器籠目土器



緑釉緑彩陶器碗

石器が語る 河川の水と砂の力

きたがや
北萱遺跡（草津市御倉町）



①剥離面の窪みや稜線がはっきりと見える、ほとんど磨滅していない石鏃



②突出した稜線などがやや丸くなる、やや磨滅した石鏃

③剥離面の窪みと稜線の区別がほとんどつかない、丸く磨滅した石鏃

今回は、石鏃^{せきぞく}の道具としての用途や使用環境ではなく、石鏃^{まもう}の摩耗状態から見た遺物のその後を辿ることにします。

縄文時代～古代の土器や石器が多量に出土するのは、上流から流され琵琶湖に面した河口付近に堆積した土砂層です。粘土や目の細かい砂の層は川の水が緩やかな状態、目の粗い砂や大きな石粒（礫）の砂礫層は急流で上流山間部での土石流や下流域での洪水など、災害が発生するような状態であったことを教えてください。

さて、打製石鏃の表面を見ると、割って作ったばかりのようなものもあれば、全体がツルツルに丸くなったものもあります。小さな石鏃では尖端が丸くなっては使い物になりません。自然の丸石と見分けがつかないのは、使用による摩耗とは考えにくく、自然の川原石と同様に、長期間にわたり水流と砂粒によって磨り減った結果なのです。

磨滅度合いは、水流や時間、どこから流れてきたのかによって異なります。北萱遺跡の砂礫層から出土した磨滅度合いの異なる石鏃は、経過時間の違いではなく、磨滅しながら川底にあった石鏃も集落にあった加工中・使用中の石鏃も、一気に河口まで押し流されたことを示していると考えます。

【石鏃の石材硬度】

北萱遺跡出土の石鏃は、ほとんどがサヌカイトと呼ばれるガラス質安山岩を材料とし、他に同じくガラス質安山岩の一種である黒曜石や石英質堆積岩であるチャートも使われています。サヌカイト・チャートは、石の硬さ（傷つきにくさ）を十段階で表すモース硬度では7で、表面を傷つけたり丸く磨いたりするのは容易ではありません。ちなみに、鋼でモース硬度は5～8.5、ダイヤモンドが10です。

石器は、石材を叩いて割ったり、割ってできた剥片にさらに打撃や押圧による剥離加工を行って作る打製石器・剥片石器と表面を砥石で磨いて作る磨製石器があり、北萱遺跡の縄文時代の石鏃は打製石器です。硬質でガラス片のように剥片ができるサヌカイトやチャートは打製石器・剥片石器に適し、柔らかい粘板岩・砂岩は磨製石器に適しています。

弥生～古墳時代の墓地と 奈良時代の祭祀場

う さ や ま
宇佐山古墳群（大津市神宮町）



宇佐山古墳群は、宇佐山の東麓斜面にあります。遺跡の中を流れる柳川支流の砂防
工事に伴って、平成 22 年度に発掘調査を行ったところ、弥生時代末～古墳時代初め
の方形周溝墓群や古墳時代中期の箱式石棺などの墳墓が見つかりました。箱式石棺に
は頭骸骨が奇跡的に遺存しており、熟年の年齢（40～60 歳）くらいで死亡した男
性が葬られていたことがわかりました。

また、柳川支流に近接して奈良時代の祭祀
場が見つかりました。ここには祀りの儀式で
火を燃やしたとみられる穴があり、この周囲
5 m ほどの範囲から土馬と呼ばれる馬形の焼
き物の破片が 50 点ほど出土しました。6 体
分以上あり、すべて意図的に壊された状態で
出土しています。土馬は溝や河川などから出
土することが多く、雨乞いや長雨止め、疫病
神封じなどの目的で使われた祭具と考えられ
ています。当時の人びとは、天災や流行病の
蔓延などを人が犯した罪や穢れによるものと
考え、これらを祓い清める祀りを盛んに行っ
ていたのです。今回出土した土馬は、体長
15cm 程度で、スリムな体型に三日月形の頭
をもち、鞍の表現がない裸馬につくられてお
り、8 世紀中頃のものと考えられます。この
ような特徴をもつ土馬は、おもに平城京や長
岡京、平安京などの都で用いられました。平
安時代には遺跡近くの湖岸の唐崎が平安宮
の祓所のひとつになっていましたが、地理的
に近い当地においても奈良時代に国家が関与
した祭祀が行われたと考えられます。



13号墳石棺頭蓋骨出土状況



土馬



土馬

戦国時代の城から みつかった穀物類

せきのつじょう
関津城遺跡（大津市関津三丁目）



土蔵



コメ（長粒）



コメ（短粒）



ムギ

関津城は六角氏の家臣である宇野氏の居城で、瀬田川東岸の小高い丘の上に築かれています。発掘調査では中国や朝鮮から輸入された陶磁器や、銅製の装飾品など、城主が「おもてなし」に使ったとみられる品々が数多く出土しています。

土蔵の内側（内部）は、火を受けて赤く変色し、多くの焼土や炭、焼けた板、焼けた壁土が残っていました。土壁の基礎には、^{じふくいし}地覆石として石を一列に並べています。また、壁内側に建てられた角材も炭化した状態で残っていました。内側の焼土や炭の中からみつかった鉄釘は、その長さから^{ゆかいた}床板や^{のじいた}野地板を打ち付けるのに使われたものとみられます。

また、炭化したコメやムギなどの穀類が大量に見つかっています。これらはくわしく観察すると別の穀物が含まれていることがわかりました。

発掘調査で確認した蔵の構造に加えて、出土遺物の整理調査をあわせることで、城での食料備蓄の方法と内容を具体的に明らかにすることができる成果として注目できます。

木棺墓から みつかった玉類

てんじんばた かみごてん
天神畑遺跡・上御殿遺跡 (高島市鴨・安曇川町三尾里)



平成 20 年度から行っている発掘調査では、これまでに古墳時代の大壁造り建物や中世馬具などの興味深い資料が見つかり、その内容は、現地説明会やホームページや“あの遺跡は今！”などでお知らせしてきました。

平成 23 年度には、古墳時代の木棺墓、古墳時代前期の当地域の首長層のものと思われる大型の住居を含む竪穴住居 6 棟、奈良時代後半から平安時代初頭の高島郡役所に関連する倉庫群と考えられる掘立柱建物 4 棟、平安時代後期の在地領主層の住居の可能性がある大規模な掘立柱建物 1 棟などが見つかりました。

古墳時代前期から中期につくられたと考えられる木棺墓からは、硬玉製勾玉やガラス製小玉を連ねた首飾りが出土しました。木棺墓は通常、群を形成することが多く、土器などが副葬される程度ですが、今回の場合は単独墓の可能性が高く、しかも、古墳に葬られる階層の人物が持つような玉類（装身具）を副葬しているという特徴があります。

これらの調査結果は、周辺地域の古墳文化や木棺墓の性格をはじめ、古代史を明らかにする貴重な成果となりました。



① 2.95m × 1.02m ・ 深さ 0.35m の墓壙内に、組合せ式木棺が納められていた痕跡を確認しました。



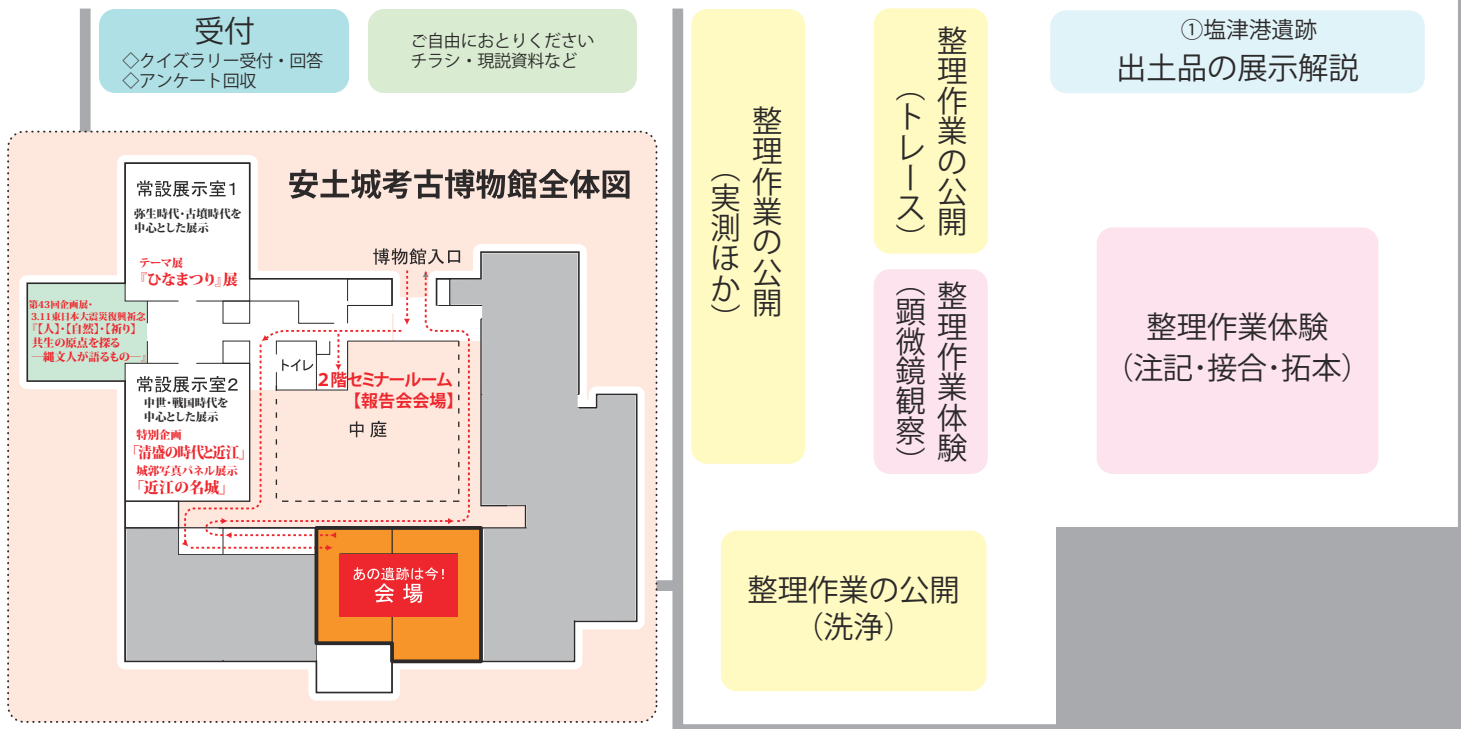
② 木棺の内部からみつかった玉類は、出土状況から首飾りとみられ、身につけた状態で埋葬されたものと考えられます。



③ みつかった玉類には硬玉製勾玉 1 点、ガラス製小玉 82 点があります。

出土品の展示解説

- ⑧上御殿遺跡 ⑦関津城遺跡 ⑥宇佐山古墳群 ⑤北萱遺跡 ④針氏城遺跡 ③清滝寺遺跡 ②針江浜遺跡



埋蔵文化財に関する催し物

第43回企画展・3.11東日本大震災復興祈念 『人』・『自然』・『祈り』共生の原点を探る — 縄文人が語るもの — 関連行事

★企画展関連連続講座「近江の縄文時代」

◇平成24年2月26日(日)13時30分～

「喰うべし!—野生動物利用の文化史—」

講師 大沼芳幸(博物館副館長兼学芸課長)

◇平成24年3月10日(土)13時30分～

「漕ぐ、獲る、運ぶ」

—革新を起こした縄文舟の考古学—

講師 瀬口眞司(財団法人滋賀県文化財保護協会)

◇平成24年3月24日(土)13時30分～

「相谷熊原土偶の源流を探る」

講師 松室孝樹(財団法人滋賀県文化財保護協会)

★現地探訪

◇平成24年3月11日(日)

『「びわ湖の貝塚」を訪ねて』

学芸員と一緒に琵琶湖の貝塚を巡ります。

【要予約・保険料等必要】

お問合せ: 滋賀県立安土城考古博物館

(TEL 0748-46-2424)

滋賀県教育委員会大地の遺産活用事業 講座 縄文人の祈りと造形

日時: 2月25日(土)13:00～16:30

会場: 米原市伊吹山文化資料館(米原市春照77)

内容: 「縄文人の祈りと造形」

滋賀県教育委員会文化財保護課 畑中英二

「湖国の曙—相谷熊原遺跡から」

財団法人滋賀県文化財保護協会 重田勉

「墓から考える縄文の村—

—滋賀県米原市杉澤遺跡の調査成果と課題—

立命館大学文学部教授 矢野健一

定員: 50名(先着順) 参加費: 無料

お問合せ: 滋賀県教育委員会

第98回滋賀県埋蔵文化財センター研究会

—平成23年度滋賀県発掘調査成果報告会—

土の中から歴史が見える'11

日時: 3月24日(土)9:30～16:30

会場: コラボしが3階大会議室(大津市打出浜2-1)

内容: 手原遺跡 宮前遺跡 宮町遺跡 石山国分遺跡ほか

定員: 250名 参加費: 無料

お問合せ: 滋賀県埋蔵文化財センター

(TEL 077-548-9681)